戦国期陰陽家の国家意識

久富木成大

はじめに
一　始・徴・表・化
二　因
三　遇
四　時
五　天道と国家の消長
おわりに
注

はじめに

『呂氏春秋』は、戦国時代（西暦紀元前五世紀～西暦紀元前三世紀）の末に呂不韋のもとで編纂された。このことはよく知られている。そこに述べられている当時の社会状況として、例えば以下のようなものがある。

○當今の世、濁るるや甚し。黔首（けんしゅ）の苦しみは、以て加ふべからず。天子すでに絶え、賢者廢伏し、世主ほしいままに行ひ、民と相離れ、黔首は告愬するところなし。（當今之世濁甚矣、黔首之苦、不可以加矣、天子既絶、賢者廢伏、世主恣行、與民相離、黔首無所告愬＝『呂氏春秋』巻第七　孟秋紀第七　振亂）

ここにいう「濁」を、「濁は乱なり」と後漢の高誘は注を加えて説明した。このように、当時は乱世であり、天子、つまり周王朝は亡びたも同然であり、目下、ここにいう「世主」が割拠して乱政をほしいままにしているのである。なお、この「世主」とは諸侯のことをいう。天下のこのような状況は、しかし、今にはじまったことではない。伝説としてつたえられている、古い時代からすでに続いているのである。

○禹の時に當り、天下は萬國なり。湯に至りて三千餘國、今存するものなし。（當禹之時、天下萬國、至於湯而三千餘國、今無存者矣＝『呂氏春秋』巻第十九　離俗覧第七　用民）

今、ここにいうように、古くからの諸侯国も、それを統べる天子とともに、その跡を絶っている。このように、徹底して過去の伝統

が失われてしまった乱世にあっては、例えば、国家なら国家の崇高さ、あるいはその根拠ともなるはずの正統性というようなものは、一体どこに求められるのであろうか。それには、さまざまな答えが、時と場合に応じて提出されるであろう。それに対して、ここでは、『呂氏春秋』が編纂された時期における、陰陽家と呼ばれた一団の人々のいうところについて、見てみたい。その際てがかりにするのは、『呂氏春秋』のなかで展開されている、国家の興亡についての彼らの発言の数々である。なお、陰陽家については、その学の大まかなところは、「陰陽五行天文歴譜等の綜合体」（陳奇猷『呂氏春秋校釈』九四七頁）というところであり、学派のうえからは、「儒家の別派にして、幾分か道家の主義を加味せるものなり」（兒島獻吉郎『支那諸子百家考』三四二頁）といえよう。その歴史的な変遷については、その出自に関しては伝説に拠るところがあろうと思われるものの、ほぼその真を伝えているのではなかろうかと考えられるのが、以下に示す後漢の班固（西暦三二～西暦九二）の説くところである。

○陰陽家者流は、蓋し義和の官より出ず。敬（つつし）んで昊天に順ひ、日月星辰を歴象し、敬んで民に時を授く。此れその長ずるところなり。拘者これを爲すに及んでは、則ち禁忌に牽かれ、小敖に泥（なず）み、人事を舎てて鬼神に任ず。（陰陽家者流、蓋出於義和之官、敬順昊天、歴象日月星辰、敬授民時、此其所長也、及拘者爲之、則牽於禁忌、泥於小敖、舎人事而任鬼神＝『漢書』藝文志）

なお、小稿の拠った『呂氏春秋』の本文は、畢沅の『呂氏春秋新校正』（二十二子本）であるということを付記して、序文のむすびとしたい。

一、始・徴・表・化

国家の興亡については、それに先立って、その徴候つまり、〝きざし〟ともいえる現象がいろいろとあるもののようである。この〝きざし〟について、『呂氏春秋』では、ことばをかえて、さまざまに言及している。くわしくは以下に説くごとくであるが、それらのうち、まず〝始〟ということについてとり上げることにする。

○治亂存亡をして、高山の深谿におけるが若く、白堊の黒漆におけるが若くならしめば、則ち智を用ふるところになし。愚なりと雖もなほ可なり。かつ治亂存亡は、則ち然らず。知るべきが如く、知らざるべきが如く、見るべきが如く、見ざるべきが如し。故に智士賢者は、相ともに心を積み慮を愁へて、以てこれを求むるも、猶尚（なほ）、管叔・蔡叔のことと、東夷八國、聴かざるの謀あり。故に治亂存亡は、その始は秋毫の若し。その秋毫を察すれば、則ち大物は過たず。（使治亂存亡、若高山之與深谿、若白堊之與黒漆、則無所用智、雖愚猶可矣、且治亂存亡則不然、如可知、如可不知、如可見、如可不見、故智士賢者、相與積心愁慮以求之、猶尚有管叔蔡叔之事、與東夷八國不聴之謀、故治亂存亡、其始若秋毫、察其秋毫、則大物不過矣＝『呂氏春秋』巻第十六　先識覧第四　察微）

ここにいう〝始〟とは、いわゆる「物に本末あり、事に終始あり」①の、終始の〝始〟であって、字義としては特殊なものではない。し

かし、ここでの用法は、「治乱存亡は、その始は秋毫の如し」とあるように、国家の治乱存亡のこととして、限定されているのである。しかもその状態は、「秋毫の如し」[2]と表現されてもいるように、ありきたりのものではない。そのため、ここにもいうように、「知ることができるようであり、できないようである。見ることができるようであり、できないようである」という、奇妙な表現のされかたがなされている。では、それを「知り、見る」ことは、いかにしてできることなのであろうか。それは、智士・賢者が、「積心愁慮」、つまり、細心の注意と苦心を積み重ねることによって、初めて可能になるのである。しかし、そのようにしたからといって、必らず「知り、見る」ことができるわけではない。その難かしさを示す例として、ここに『呂氏春秋』では、智士・賢者とされる周公のことをあげている。その周公でさえ、管蔡の流言の行為、それに応じた八国の謀叛のことにかかわる〝始〟を見ぬくことができなかった。もしそれができていたのであれば、建国まもない周王朝の基礎をゆるがしたこの騒擾は起こらなかったであろう。このように、国家の興亡についての、そのきざしともいえる〝始〟は、厳然として存在してはいるのである。しかし、いかなる能力の持主であっても、容易なことでは、それに近づき、それを知り、とらえることはできないのであると、ここに『呂氏春秋』ではいう。

このように知ることの困難な〝始〟ではあるが、それを知るための心がけとしては、さきにのべた「積心愁慮」ということのほかに、どのようなことが考えられるであろうか。

○魯國の法、魯人、人のために諸侯に臣妾たり。能くこれを贖(あがな)ふものあらば、その金を府に取る。子貢、魯人を諸侯に贖ふ。来りて讓り、その金を取らず。孔子曰く、賜はこれを失(あやま)てり。自今以往、魯人は人を贖はじ。その金を取るも、則ち行いに損するなく、その金を取らざれば、則ちまた人を贖はじ、と。子路、溺者を拯(すく)ふ。その人これを拝するに牛を以てせり。子路これを受く。孔子曰く、魯人は必ず溺者を拯はん、と。孔子これを見て、以て細かに化遠を観しなり。[3]

(魯國之法、魯人爲人臣妾於諸侯、有能贖之者、取其金於府、子貢贖魯人於諸侯、來而讓、不取其金、孔子曰、賜失之矣、自今以往魯人不贖人矣、取其金則無損於行、不取其金、則不復贖人矣、子路拯溺者、其人拝之以牛、子路受之、孔子曰、魯人必拯溺者矣、孔子見之以細觀化遠也=『呂氏春秋』巻十六　先識覧第四　察微)

これは孔子が、弟子の子貢と子路の行為について、批評したものである。子貢は、外国の君主の奴隷となっている魯の同胞を、自分のお金を出して解放してやった。それに要したお金は、魯国の規定によって、後日、政府から支給されることになっていたのである。しかし子貢は、それを受けとらなかった。子路は、水に溺れた人を助けた。そうしてお礼の牛をもらった。二人の師匠である孔子は、子貢を批難し、子路を誉めた。それは、一見無欲で立派に見える子貢の行為が、のちのちに影響して魯の人々の、同胞を解放しようという意欲をそぐことを恐れたからである。また、取らずもがなのお礼を受けた子路のしたことが、魯における人命救助の意識の昂揚に役立つと見てとったからである。なるほど、子貢と子路の行為それ

自体は、個人的で小さい。しかしながら、その中には後日、魯の社会風潮を形成する、重大な因子を含んでいるのである。つまり、のちになって、魯では同胞愛の心が欠けてしまったり、人命救助の精神が失われてしまうかもしれない。そうした風潮がはびこれば、戦争をしても強くはならないであろうし、亡国の重大事をも招きかねないであろう。〃始〃を捉えるには、遠くを見透す眼が不可欠である。

ところで、以下に少しばかり、ここに〃始〃に関連してのべられているところの〃化〃のことにふれておこう。亡国の〃始〃を知るには、ここに引いた文章にも明らかにされているところであるが、〃化〃といわれているものを、推知しなければならない。そうして、その〃化〃とは、現実の物事の中にあって、後日かならずそうなる勢（いきおい）のことをいう。その勢いを発見④することに意を用いなければならない。こうしてこそ〃始〃をとらえることになるのである。さきほどから述べられている、智士・賢者の「積心愁慮」ということも、結局のところ〃始〃に介在する〃化〃を推知するためになされるのであるといえよう。それはしかし、具体的にはどのようにして可能になるのであろうか。このことについて、その答えを示唆してくれる、以下のような記述についてみてみよう。

○齋の桓公、管仲と謀り、莒を伐たんとす。謀いまだ發（おこな）はずして國に聞こゆ。桓公これを怪しんで曰く、仲父と謀り莒を伐たんとす。謀いまだ發はずして國に聞こゆ。その故何ぞや、と。管仲曰く、國に必らず聖人あらん、と。……少頃にして東郭牙いたる。管仲曰く、これ必らず是のみ、と。……管子曰く、子か莒を伐つことを言ひしものは、と。對へて曰く、然り、と。……臣聞く、君子に三色あり。顯然として喜樂するものは、鐘鼓の色なり。湫然として清靜なるものは、衰絰の色なり。艴然として充盈し、手足おごそかなるものは、兵革の色なり、と。さきに臣、君の臺上に在るを望むや、艴然として充盈し、手足のおごそかなりしものは、これ兵革の色なり。君、咥（ひら）きて唫（と）ぢず。言ふところのものは莒なり。君、臂をあげて指す、當つるところのものは莒なり。臣ひそかに以て諸侯の服せざるものを慮るに、それただ莒か。臣、ゆえにこれを言へり。と。およそ、耳の聞こゆるは聲を以てすればなり。今、その聲を聞かずして、その容と臂とを以てす。これ東牙の耳を以て聽かずして聞けるなり。桓公・管仲よく匿（かく）すと雖も、隠す能はず。故に聖人は聲なきに聽き、形なきに視る。詹何・田子方・老耽これなり。（齋桓公與管仲謀、伐莒、謀未發而聞於國、其故何也、管仲曰、國必有聖人也、……少頃東郭牙至、管仲曰、此必是已、……管子曰、子邪、言伐莒者、對曰、然、……臣聞、君子有三色、顯然喜樂者、鐘鼓之色也、湫然清靜者、衰絰之色也、艴然充盈手足矜者、兵革之色也、日者臣望君之在臺上也、艴然充盈手足矜者、此兵革之色也、君、咥而不唫、所言者莒也、君擧臂而指、所當者莒也、臣竊以慮諸侯之不服者、其惟莒乎、臣故言之、凡耳之聞以聲也、今不聞其聲、而以其容與臂、是東郭牙不以耳聽而聞也、桓公管仲雖善匿、弗能隱矣、故聖人聽於無聲、視於無形、詹何田子方老耽是也＝『呂氏春秋』巻第十八　審應覧第六　重言）

東郭牙は斉の諫臣として有名で、先秦の古典にしばしば登場する。例えば『韓非子』（外儲説　左下）には、管仲一人に斉国の大権を委ねようとする桓公に対して、その危険なことを説き、複数の人物に権力を分散させて担当させるよう仕向ける東郭牙のことがえがかれている。ここに『呂氏春秋』から引いた文章のなかでは、桓公と管仲が深く隠していた、莒を伐つという謀りごとをさぐりあてた東郭牙の勘の冴えぶりが、興味深くえがき出されている。そのような東郭牙の方法を、ここでは「声なきに聴き、形なきに視る」、ということに要約して示している。このことは、結局のところ、現象が現象としての形をとるまえに、そのまわりにある、あらゆる要素を綜合して、そこから生ずる事象を帰納するということである。そうすれば、現在が、将来どのように動き、移るかということが目に見えるようになるであろう。将来のそのような姿を導くもので、現在、それに直結している事象こそが、まさに〝始〟というものである。これらのことは、現象の背後にある物事の本質を鋭く、誤りなく見ぬくことによってしか、達成されない。常人にはきわめて困難なことである。そのため、ここでは、詹何・田子方・老耽の三人を、この「声なきに聞き、形なきに視る」ことのできる賢聖の人として、あげている。この三人について、後漢の人、高誘は、ここに注を加えて、以下のように説明している。つまり、「詹何は体道の人なり。田子方は子貢に学び、賢仁を尚び、礼儀を貴ぶ。魏の文侯、これを友とす。老耽は無為を学び、道徳を貴ぶ。周の史伯陽なり。三川つき、周のまさに亡びんとするを知る。孔子これを師とす」と。

では、つぎに〝秋毫の末〟ともいわれるほど、〝始〟が、まさに〝始〟、つまり亡国の始まりであることは、認識しにくいことであるのであるが、そのことを、十分に知らせてくれるような、つぎのような例について見てみよう。

○楚の邊邑を卑梁と曰ふ。その處女と呉の邊邑の處女と境上に桑す。戯れて卑梁の處女を傷つく。卑梁の人、その傷子を操（と）りて以て呉人を讓（せ）む。呉人のこれに應ふること恭ならず。怒る。殺してこれを去る。呉人ゆきてこれに報い、盡くその家を屠る。卑梁公、怒る。曰く、呉人、焉んぞ敢へてわが邑を攻めん、と。兵を擧げて反りてこれを攻む。老弱ことごとくこれを殺せり。呉王夷昧、これを聞きて怒り、人をして兵を擧げしめ、楚の邊邑を侵し、克夷してのち、これを去る。呉・楚これを以て大いに隆（たたか）ふ。[5] 呉の公子光、また師を率ゐて、楚人と雞父に戰ひ、大いに楚人を敗り、その師潘子臣・小帷子・陳の夏齧を獲たり。また反りて郢を伐ち、荊の平王の夫人を得て歸れり。實に雞父の戰たり。（楚之邊邑曰卑梁、其處女與呉之邊邑處女、桑於境上、戯而傷卑梁之處女、卑梁人操其傷子、以讓呉人、呉人應之不恭、怒、殺而去之、呉人往報之、盡屠其家、卑梁公怒、曰、呉人焉敢攻吾邑、擧兵反攻之、老弱盡殺之矣、呉王夷昧、聞之怒、使人擧兵、侵楚之邊邑、克夷而後去之、呉楚以此大隆、呉公子光、又率師與楚人戰於雞父、大敗楚人、獲其師潘子臣、小帷子、陳夏齧、又反伐郢、得荊平王之夫人以歸、實雞父之戰＝『呂氏春秋』巻第十六　先識覧第四　察微）

『春秋左氏伝』昭公二十三年（西暦紀元前五一九年）に述べるところによると、この年の七月戊辰の日、[6] 呉に伐たれた州来を救うた

めに、楚が挙兵し、胡・沈・陳・頓・許・莅をひきいて連合軍を編成し、楚の雞父の地で、呉軍と相まみえた。その結果は、予想に反して楚をはじめとする連合国側の大敗におわった。それ以後、しばらくは呉楚の勢力が逆転し、亡国のせとぎわまで追い込まれた楚は、呉に対して雌伏を余儀なくされることになるのである。これが、史上にいわゆる〝雞父の戦い〟である。

ところで、『左伝』にのべる、呉によって楚が亡ぼされかけた、この〝雞父の戦い〟の〝始〟を、さきに見たように、『呂氏春秋』では、呉楚の国境における桑つみ娘たちの戯れのなかにあるという。桑をつむ処女たちの無心の戯れが、のちに楚を亡国の瀬戸ぎわにまで追いこんだということになるのである。〝始〟が〝始〟であること、つまり、ある平凡なものごとが、のちの大事件の〝きざし〟であるということを知ることは、一般人には、至難のことなのである。このような〝始〟は、結局のところ、終局の大事につらなるのであるが、そのことを、『呂氏春秋』では、つぎのようにいっている。

○およそ國を持する、太上は始を知り、其の次は終りを知り、其の次は中を知る。三つのもの能はずんば、國必らず危く、身必らず窮す。（凡持國太上知始、其次知終、其次知中、三者不能、國必危、身必窮＝『呂氏春秋』巻第十六　先識覧第四　察微）

これによると、〝始〟は、その中間において〝中〟としてかたちをとり、終極において、〝終〟としてあらわれるのである。したがって、〝始〟は、大きな時間の流れのなかにあって、やがて、一般人にとっては、思いがけないかたちで、あらわにその姿を出現させるわけである。

つぎに、〝始〟や〝化〟とともに論じられる、〝徵〟あるいは〝徵表〟などということにふれておこう。

○聖人の人に過ぐる所以は、先知を以てなり。先知なれば、必らず徵表を審らかにす。徵表を審らかにすること無くして先知ならんと欲すれば、堯舜と衆人と、等を同じくす。徵、易しといへども、表、難しといへども、聖人は則ち以て飄すべからず。衆人は則ち、道ここに至れるものなし。（聖人之所以過人以先知、先知必審徵表、無審徵表而欲先知、堯舜與衆人同等、徵雖易、表雖難、聖人則不可以飄矣、衆人則無道至焉＝『呂氏春秋』巻第二十　恃君覧第八　觀表）

聖人が常人と異なるところは、先知、つまり物事の前ぶれを正確に知るところにあるという。当然の事として、その前ぶれの知り方は、単なる当てずっぽうによるのではなく、ここにいうように、あくまで正確におこなわなければならない。そのために、〝徵表〟をつかむ必要があるのであると、いう。では、その〝徵表〟とは何であろうか。実は、このことの意味は、古来異説が続出し、とらえにくいのであるが、ここでは〝徵〟とは物体の特徵、〝表〟とは心の動きという説に拠っておこう。[10] これをまた、より一般化すれば、以下のごとくになろうか。つまり〝徵〟とは、外面、すなわち現象面にあらわれた本質的なもの、〝表〟とは、現象面からとらえた、そのものの本質ということになろうか。したがって、〝徵〟も〝表〟も、物事の本質につらなるという点で、結局は一つのものである。聖人の前ぶれのつかみ方というのは、この〝徵〟・〝表〟を正確にとらえて、それを基礎にしてなすのであると、ここではいう。つまり、〝前ぶれ〟

というに値する前ぶれ、正確に将来につらなっている現在とでもいおうか、そのようなものをつかみうるのは、聖人だけで、その理由は、眼前の物事の本質を、聖人は常人とちがって、より正確につかめる人であるからであるという。聖人と、この〝徴〟・〝表〟について、『呂氏春秋』では、以下のようにも述べている。

○古の善く馬を相するもの、寒風是は口齒を相し、麻朝は頰を相し、子女厲は目を相し、衞忌は髭を相し、許鄙は脈を相し、投伐褐は胷脅を相し、管青は臂胻を相し、陳悲は股脚を相し、秦牙は前を相し、贊君は後を相す。およそこの十人は、みな天下の良工なり。趙の王良・秦の伯樂・九方煙の尤（すぐ）れてその妙を盡すが若し。その相する所以のもの同じからず。馬の一徴を見るや、而して節の高卑、足の滑易、材の堅脆、能の長短を知る。ひとり馬を相するのみ然るにあらざるなり。人もまた徴あり。事と國とみな徴あり。聖人は、上は千歳を知り、下は千歳を知る。（古之善相馬者、寒風是相口齒、麻朝相頰、子女厲相目、衞忌相髭、許鄙相脈、投伐褐相胷脅、管青相臂胻、陳悲相股脚、秦牙相前、贊君相後、凡此十人者、皆天下良工也、若趙之王良、秦之伯樂、九方堙尤盡其妙矣、其所以相者不同、見馬之一徴也、而知節之高卑、足之滑易、材之堅脆、能之長短、非獨相馬然也、人亦有徴、事與國皆有徴、聖人上知千歳、下知千歳＝『呂氏春秋』巻第二十　恃君覧第八　觀表）

馬を評価するのに、十人の目のつけどころが、ここに述べるように、一人一人それぞれちがうのである。しかし、帰着するところは、馬の価値をそれによって正しくとらえるという点で、一つである。これと同じように、聖人一人一人において、何を〝徴〟または〝表〟とするかは、それぞれ別でありうるのである。しかし、結局のところ、その聖人たちはみな、それによって、その人・事・国の過去と未来、それぞれ千年ぐらいの動きは知ることができるという。

以上、〝始〟・〝化〟・〝徴〟・〝表〟ということについて見てきた。これを国家のこととして考えてみると、それぞれはいかなる関係にあるのであろうか。いくつもの現象の中から、国家の興亡にかかわるものがどれであるかを知らなければならないのであるが、一つ一つの現象のエネルギーを観察する仕方と、それらの本質を内・外両面からさぐる仕方と、この二つの方法が、そのために考えられるであろう。そうして、前者の、エネルギー、つまり〝勢〟をとらえる仕方で、これこそは興亡にかかわるほどの勢いに満ちたものであると判断される現象があれば、それこそが〝始〟であるということになる。また、後者の、ある現象の内面と外面の分析によってとらえられた本質というものが、まさしく興亡そのものに連なるものであるならば、それがまた〝始〟というべきものであろう。〝始〟を〝始〟とさとることはまことにむつかしく、その困難さを〝秋毫〟という表現によって象徴しているのであるが、その困難を突破する手段を、〝化〟または〝徴〟〝表〟ということばで表現しているのであるということが、ここに至って明白となってくるのである。

では最後に、国家の興亡にかかわる〝始〟など、つまり〝前ぶれ〟と考えられるものの数々は、一体、何に由来するものとして『呂氏春秋』ではとらえているのかということを、確認しておきたい。

○およそ國の亡ぶるや、有道のもの必ずまず去るは、古今一なり。

……夏桀迷惑、暴亂いよいよ甚だし。太史、終古をして乃ち出奔して商に如（ゆ）かしむ。……守法の臣、おのずから商に歸せり。殷の内史向摯、紂のいよいよ亂れて迷惑するを見るや、是においてその圖法を載せ、出亡して周にゆけり。……守法の臣、周國に出奔せり。（凡國之亡也、有道者必先去、古今一也、……夏桀迷惑、暴亂愈甚、太史令終古乃出奔如商、……守法之臣自歸于商、殷内史向摯、見紂之愈亂迷惑也、於是載其圖法、出亡之周、……守法之臣、出奔周國＝『呂氏春秋』巻第十六　先識覧第四　先識）

亡国にあたって先ず第一に有道の人、つまり賢者がその国を去るということが、決まったことのように起こった。これもいわば広い意味で亡国の〝前ぶれ〟、つまり〝始〟とみてよい。ここにのべるように、夏・殷の亡国に際して、実際そのようなことがあったという。そうして、亡国を去った賢者は、おのずから興国へ向かったのである。このような現象は、一体どのような力によって引き起こされたと考えられていたのであろうか。

○晉の太史屠黍、……曰く、臣これを聞く、國の興るや、天はこれに賢人と極言の士とを遺り、國の亡びんとするや、天はこれに亂人と善諛の士とを遺る、と。（晉太史屠黍、……曰、臣聞之、國之興也、天遺之賢人與極言之士、國之亡也、天遺之亂人與善諛之士＝『呂氏春秋』巻第十六　先識覧第四　先識）

国家の興亡の前ぶれ、つまり〝始〟として入国あるいは出国する賢人や愚人がいるわけである。それは他人にすすめられたり、自らの意志であるように見える場合もある。しかし、それは結局のところ天がなすのであると、当時の人々は考えていたようである。ここでは、〝始〟に属すると考えられる一つの現象について述べたのである。だがこのことは、国家の興亡にかかわる、この章で〝始〟とともに取り扱ってきた〝化〟・〝徵〟・〝表〟についても、その由来するところを、十分に示唆してくれるもののように思われる。

二、因

〝因〟ということについて、『呂氏春秋』では、つぎのようにのべている。

○三代の寶とするところは、因に如くはなし。因なれば則ち敵なし。禹は三江五湖を通じ、伊闕の溝を決し、陸に廻し、これを東海に注ぎしは、水の力に因れるなり。舜は一たび徒りて邑を成し、再び徒りて都を成し、三たび徒りて國を成せり。而して堯のこれに禪位を授けしは、人の心に因れるなり。湯・武の千乘を以て夏商を制せしは、民の欲に因れるなり。（三代所寶、莫如因、因則無敵、禹通三江五湖、決伊闕溝、迴陸注之東海、因水之力也、舜一徒成邑、再徒成都、三徒成國、而堯授之禪位、因人之心也、湯武以千乘制夏商、因民之欲也＝『呂氏春秋』巻十五慎大覧第三　貴因）

これによると、夏・殷・周三代において最も重んじられたのは〝因〟であり、それぞれの王朝が強盛を誇ったのも〝因〟によるところが大であったのだという。それらのうち、夏王朝の始祖、禹は、水の力に〝因〟って成功した。舜が堯のゆずりを受けたのは、人望が高かっ

たことに〝因〟る。湯王が夏の桀に代って殷王朝を興したのは、人民の新王朝建設へののぞみ、つまり欲望に〝因〟ったからである。武王が殷の紂王をたおして周王朝をおこしたのも、やはり民衆の望むところに〝因〟って行動した結果であった。このように、国家が興るにあたっては、ここにいうように、いろいろなかたちでの〝因〟ということがあったのである。では、〝因〟によって事を行うとはどのようなことであろうか。例をあげて示そう。

○秦に如（ゆ）くものの、立ちて至るは、車あればなり。越に適くものの坐して至るは、舟あればなり。秦越は遠塗なり。竫立安坐して至るは、その械に因るなり。（如秦者、立而至有車也、適越者、坐而至有舟也、秦越遠塗也、竫立安坐而至者、因其械也＝『呂氏春秋』巻第十五　慎大覧第三　貴因）

先秦時代、秦は西方の、越は南方の、ともに辺境の地とされた。これらの遠隔の地に行こうとするものの苦労は、なみ大ていのことではなかった。ところが交通が発達し、秦に行くには馬車が利用できるようになり、越には舟運が開かれることになった。そうなるとかつての長途の旅につきものの苦労は、単なる昔語りになってしまった。馬車に乗り、立ったままで秦に行けるようになり、あるいは舟の中に座ったままで越に到着してしまう。つまり、乗りものに乗っているだけで、その間、自分の力は全然使用することなく目的地に行くことができるのである。さきにのべた、〝因〟によって国家を興すということも、このことと同じである。みずからの力は全然労することなく、他の要因に依拠することによって、建国という大目的を達成することができたからである。

〝因〟というものは、このように便利この上もないものである。しかし、それは無条件に存在しているものではない。その〝因〟に乗ずることができるためには、みずからある特殊な能力を備えているとか、さまざまな条件を満たすことができるとか、あるいはまた種々の恵まれた状況におかれているなどというようなことがなければならない。たとえば、以下のごとくである。

○武王、人をして殷を候（うかが）はしむ。反りて岐周に報じて曰く、殷はそれ亂れたり、と。……讒慝、良に勝つ、と。武王曰く、なほ未だしきなり、と。またまた往き、反りて報じて曰く、その亂れや加はれり……賢者出走せり、と。武王曰く、なほ未だしきなり、と。又往く。反りて報じて曰く、その亂れや甚し、……百姓あへて誹怨せず、と。武王曰く、嘻（ああ）、遽（と）く太公に告げよ、と。太公こたへて曰く、讒慝、良に勝つを、命（なづ）けて戮といふ。賢者の出走するを、命けて崩といふ。百姓あへて誹怨せざるを、命けて刑勝といふ。その亂れや至れり。以て駕（くは）ふべからず、と。故に選車三百、虎賁三千、朝に甲子の期を要（ちか）ひて、紂とらへられたり。則ち武王は、固よりその與に敵たること無きを知るなり。その用ふるところに因らば、何の敵かこれあらん。（武王使人候殷、反報岐周曰、殷其亂矣、……讒慝勝良、武王曰尚未也、又復往、反報曰、其亂加矣、……賢者出走矣、武王曰、尚未也、又往、反報曰、其亂甚矣、……百姓不敢誹怨矣、武王曰、嘻、遽告太公、太公對曰、讒慝勝良、命曰戮、賢者出走、命曰崩、百姓不敢誹怨、命曰刑勝、其亂至矣、不可以駕矣、故選車三百、

虎賁三千、朝要甲子之期、而紂爲禽、則武王固知其無與爲敵也、因其所用、何敵之有矣＝『呂氏春秋』巻第十五　慎大覽第三　貴因）

これは、武王が殷を亡ぼしたときのことを述べたものである。ここに、太公のことばにあるように、殷は「その乱れや至れり。以て駕（くわ）うべからず」、という状態におちいっている。つまり、これ以上乱れようがないというところにまで、殷の乱れはひどくなっているという。まさに、殷は武王の敵ではないのである。一方にこのような敵の状況がありながら、それに加えて、武王には精兵がある。そのことをここには、「その用うる所に因らば、何の敵かあらん」といっている。まさに、武王は舟車に乗って目的地に到着するようなものであった。殷の乱れ、自らの精兵、これがこのときにおける武王の〝因〟であったのである。これがなければ、武王といえども、殷を亡ぼすことができたかどうかわからない。さらに、殷周の興亡に際しての武王にまつわる〝因〟には、以下のようなものもあった。

○武王、鮪水に至る。殷、膠鬲をして周師を候（うかが）はしむ。武王これを見る。膠鬲曰く、西伯、將たいづくにゆかんとする。われを欺くなかれ、と。武王曰く、子を欺かず。將に殷にゆかんとするなり、と。膠鬲曰く、揭（いつ）至るや、と。武王曰く、將に甲子を以て殷郊に至らんとす。子、これを以て報ぜよ、と。膠鬲かへる。天雨ふり、日夜やまず、武王疾く行きて輟（や）めず。軍師みな諫めて曰く、卒、病まん。請ふ、これを休せん、と。武王曰く、われすでに膠鬲をして、甲子の期を以てその主に報ぜしめたり。今、甲子に至らずば、これ膠鬲をして信ならざらしむるなり。膠鬲信ならずば、その主かならずこれを殺さん。われ疾く行きて、以て膠鬲の死を救はん、と。武王はたして甲子を以て殷郊に至る。殷すでに先陳せり。殷に至り、因りて戰ひ、大いにこれに克てり。これ武生の義なり。人、人の欲するところを爲し、おのれ、人の惡むところを爲す。先陳なんぞ益せん。たまたま武王をして、耕さずして穫しめしなり。（武王至鮪水、殷使膠鬲候周師、武王見之、膠鬲曰、西伯將何之、無欺我也、武王曰、不子欺、將之殷也、膠鬲曰、揭至、武王曰、將以甲子至殷郊、子以是報矣、膠鬲行、天雨、日夜不休、武王疾行不輟、軍師皆諫曰、卒病、請休之、武王曰、吾已令膠鬲以甲子之期、報其主矣、今甲子不至、是令膠鬲不信也、膠鬲不信也、其主必殺之、吾疾行以救膠鬲之死也、武王果以甲子至殷郊、殷已先陳矣、至殷、因戰、大克之、此武王之義也、人爲人之所欲、己爲人之所惡、先陳何益、適令武王不耕而穫＝『呂氏春秋』巻第十五　慎大覽第三　貴因）

ここに、武王は殷に到着し、「因りて戰い、大いにこれに克てり」という。このように、〝因〟に乗じて武王は戰い、そうして勝利を収めたわけで、彼自身は、それほど苦労はしていないということになるのであろうか。そのところを、ここには、「耕さずして、穫」た、と表現してある。では、その〝因〟とは何をさしていっているのであろうか。それは第一に、敵方の斥候にまで信義を守りとおし、あくまでその人物の生命を重んじ、自らの利害は無視するという、武王の人間性の高さである。武王のこの高潔な生き方を、ここでは、「人、人の欲するところをなす」といっている。他方、殷の紂王は、武王の

この生き方とは正反対である。ここではそれを、「人の悪むところをなす」、と書いている。紂王は武王が戦場に到着する前に、すでに陣をしき整えて、万全の態勢で迎えうった。しかし戦いの結果はすでに述べたように、ここでいっているとおり、「先陳、何ぞ益せん」というようなありさまであった。したがって、ここにいう〝因〟は、武王と紂王の、人間性の差にあったと見てよいであろう。兵士たちが、あるいは民衆が、武王のためには積極的に働き、紂王のためにはそれほどのことはしなかった。ここに勝敗の分かれ目があったのである。そのために、陣を整えてもいない軍勢が、早くから布陣して迎えうった相手方を、やすやすと打ち負かすという、常識に反するようなことが起こったのである。これも武王が〝因〟に乗じたためであり、武王は、「耕さずして穫」たのである。しかしながら、このような〝因〟は、誰にでも恵まれるのではない。武王のような人格の所有者にして、はじめて有りうるものである。

では、このような殷周というような国家の興亡にも関与した〝因〟とは、結局のところ何であるのであろうか。以下に説くところを見てみよう。

○それ天を審らかにするもの、列星を察して四時を知るは、因なり。歴を推するもの、月行を視て晦朔を知るは因なり。禹の裸國にゆく、裸して入り衣して出でしは因なり。墨子、荆王に見ゆ。錦衣して笙を吹きしは、因なり。孔子、彌子瑕に道（よ）りて、釐夫人を見しは、因なり。湯・武亂世に遭ひ、苦民に臨み、その義を揚げ、その功を成ししは、因なり。故に因なれば則ち功あり、専なれば則ち拙なり。因なるものは敵なし。國大なりと雖も、民衆しと雖も、何ぞ益せん。（夫審天者、察列星而知四時、因也、推歴者、視月行而知晦朔、因也、禹之裸國、裸入衣出、因也、墨子見荆王、錦衣吹笙、因也、孔子道彌子瑕、見釐夫人、因也、湯武遭亂世、臨苦民、揚其義、成其功、因也、故因則功、専則拙、因者無敵、國雖大、民雖衆、何益＝『呂氏春秋』巻第十五　愼大覽第三　貴因）

ここに、まずいうように、天文・歴数の学問の根元にあり、それを成り立たせている原理が、ほかでもない、〝因〟である。そうして、その天文も歴数も、ここにのべられているように、星や月の運行を観察することによって成立っているのである。そのために、〝因〟とは、星や月などの、天体の運行、推移の原理であるということが推測される。ここに引いた文章では、以下に、禹・墨子・孔子[11]・殷の湯王・周の武王が、このような〝因〟に乗ずることによって、成功をおさめたことをいう。彼らの行為が、天文や歴数の原理にかなっていたために、役らは無理なく成功したのであると、彼らの成功の理由を説明している。一般に、国を営むには、領土の広さと、人民の多さが必須のことのように考えられる。しかし、それだけでは国家が興る条件にはならないと、ここではおそらく桀紂などを念頭に入れて、[12]「国大なりといへども、民衆しといへども、何ぞ益せん」、と結論づけている。国の興起には、より本質的なものとして、〝因〟こそが必須のものであるというわけである。そして、その〝因〟は、冒頭にもいうように、天体の原理として、天に由来するものであると、いうのである。

三、遇

国家の興亡をめぐっての、無数ともいえる現象のなかの一つで、〝遇〟と『呂氏春秋』が表現するものがある。例えば以下のごとくである。

○およそ治亂存亡、安危彊弱は、必ずその遇あり。然して後に成るべし。おのおの一なれば則ち設けず。故に桀紂は不肖なりと雖も、その亡びしは湯武に遇へばなり。湯武に遇ひしは天なり。桀紂の不肖にあらざるなり。湯武は賢なりと雖も、その王たりしは桀紂に遇へばなり。桀紂に遇ひしは天なり。湯武の賢にあらざるなり。桀紂のごとき、湯武に遇はずば未だ必ずしも亡びざるなり。桀紂亡びずんば、不肖と雖も、辱かしめ未だここに至らず。もし湯武をして桀紂に遇はざらしめば、未だ必らずしも王たらざるなり。湯武王たらずんば、賢と雖も、顯いまだここに至らず。故に人主の大功あるは、不肖を聞かず。亡國の主は、賢を聞かず。これを譬（たと）ふれば、良農の土地の宜しきを辯じ、耕耨の事を謹しむが若し。未だ必ずしも収めざるなり。然して収むるものは、必ずこの人なり。始は時雨に遇ふに在り。時雨に遇ふは天地なり。良農の能くするところにあらざるなり。（凡治亂存亡、安危彊弱、必有其遇、然後可成、各一則不設、故桀紂雖不肖、其亡遇湯武也、遇湯武、天也、非桀紂之不肖也、湯武雖賢、其王遇桀紂也、遇桀紂、天也、非湯武之賢也、若桀紂、不遇湯武、未必亡也、桀紂不亡、雖不肖辱未至於此、若使湯武不遇桀紂、未必王也、湯武不王、雖賢、顯未至於此、故人主有大功、不聞不肖、亡国之主、不聞賢、譬之、若良農辯土地之宜、謹耕耨之事、未必収也、然而収者必此人也、始在於遇時雨、遇時雨、天地也、非良農所能爲也＝『呂氏春秋』巻第十四　孝行覧第二　長攻）

国家の興亡のうち、ここでは、夏・殷・周三代のことを問題にする。夏の桀王を亡ぼしたのが殷の湯王であり、殷の紂王を倒して周を興したのが武王というわけである。したがって、桀紂が亡国の主であり、湯武が興国の王ということになる。ところで、ここで問題にされるのは、これらの人々のあいだで亡国と興国という明暗を分ける大事件がおこったのは、これらの人々の意志を遠くはなれたところのものによって決定されたのであるということである。この歴史の交代の原動力ともなったものを、ここでは〝遇〟とよんでいるのである。

では、その〝遇〟とは何であろうか。ここに引いた文章の冒頭で、それについてつぎのようにいう。すなわち、「およそ、治乱存亡、安危彊弱は、必らず遇あって、然るのちに成るべし。各々一なれば則ち設けず」と。この意味は、おおよそ以下のごとくである。国家の治乱興亡、あるいは安危強弱ということは、そのことにかかわる二人の人物が出会うことがなければ、起こらないのである。その一人の人物だけでは、決してそのようにはならないのだ。[13] このように、〝遇〟というのは、二人の人物、あるいは二つの出来ごとが遭遇することにほかならない。

これまで見てきたところで、〝遇〟が遭遇、つまり出会いのことで

あるということがわかった。この、〝遇〟によって、功を得て幸福になり、後世にながく名声を残す湯武のような人々がいる。一方では桀紂のごとく、亡国の憂き目に会い、実際以上の悪名をのちの世まで伝えられるようなこともある。一体、〝遇〟によって幸を得るのと、不幸を得るのとは、日ごろの生き方の良し悪しにかかわるところがあるのであろうか。このことに何らかの答えを与えてくれるはずの三つの事例を、『呂氏春秋』では紹介しているが、ここにはその中から一つをえらんで示そう。

○越國おおいに饑う。王おそれ范蠡を召して謀る。范蠡曰く、王何ぞ患へん。今の饑うるは、これ越の福（さいはひ）にして呉の禍（わざはひ）なり。それ呉國は、甚だ富んで財あまりあり。その王は年少にして、智すくなく才輕し。須臾の名を好んで、後患を患へず。王もし幣を重くし辭を卑くして、以て糴（てき）を呉に請はば、則ち食うこと得べきなり。食うこと得れば、それ卒に越は必ず呉を有せん。而るを王なんぞ患へん、と。越王曰く、善し、と。乃ち人をして食を呉に請はしむ。呉王將にこれを與へんとす。伍子胥すすんで諫めて曰く、與ふべからざるなり。それ呉の越における、土を接し境を鄰す。道は人通じ易し。仇讎敵戰の國なり。呉の越を喪ふにあらずんば、越は必ず呉を喪はん。燕・秦・齋・晉のごときは、山處陸居、豈に能く五湖九江を踰り、十七阨を越え、以て呉を有せんや。故に曰く、呉の越を喪ふにあらずんば、越かならず呉を喪はん、と。今まさにこれに粟を輸（おく）り、これに食を與へんとす。これわが讎を長じてわが仇を養ふなり。財とぼしくして民おそる。悔ゆとも及ぶことなきなり。與ふるなくしてこれを攻め、その數を固くするに若かざるなり。これむかしわが先王の霸たりしゆえんなり。かつそれ饑は代事なり。なほ淵の阪におけるがごとし。たれの國にかあることなからん、と。呉王曰く、然らず、われこれを聞く。義兵は攻服せず。仁者は饑餓を食（やしな）ふ、と。今、服してこれを攻む、義兵にあらざるなり。饑ゑて食はず、仁體にあらざるなり。不仁不義ならば、十越を得と雖も、われ爲さざるなり、と。遂にこれに食を與ふ。三年を出でずして、呉もまた饑う。人をして食を越に請はしむ。越王與へず。乃ちこれを攻む。夫差とらへらる。（越國大饑、王恐、召范蠡而謀、范蠡曰、王何患焉、今之饑、此越之福而呉之禍也、夫呉國甚富而財有餘、其王年少智寡才輕、好須臾之名、不患後患、王若重幣卑辭、以請糴於呉則食可得也、食得其卒越必有呉、而王何患焉、越王曰、善、乃使人請食於呉、呉王將與之、伍子胥進諫曰、不可與也、夫呉之與越、接土鄰境、道易人通、仇讎敵戰之國也、非呉喪越、越必喪呉、若燕秦齋晉、山處陸居、豈能踰五湖九江、越十七阨、以有呉哉、故曰非呉喪越、越必喪呉、今將輸之粟、與之食、是長吾讎而養吾仇也、財匱而民恐、悔無及也、不若勿與而攻之固其數也、此昔吾先王之所以霸、且夫饑代事也、猶淵之與阪、誰國無有、呉王曰、不然、吾聞之、義兵不攻服、仁者食饑餓、今服而攻之、非義兵也、饑而不食、非仁體也、不仁不義、雖得十越吾不爲也、遂與之食、不出三年、而呉亦饑、使人請食於越、越王弗與、乃攻之、夫差爲禽＝『呂氏春秋』巻第十四　孝行覽第二　長攻）

ここでは、越王句踐と、呉王夫差との〝遇〟を問題にしている。その内容は、ほぼ以下のごとくである。越王句踐のとき、越で飢饉がおこった。王は大いに困り、なすすべを知らなかった。しかし、智将范蠡はおちついたものであった。彼はこの時を、呉をほろぼすためのきっかけともなる、千載一遇の好機として見たからである。つまり、隣国呉にたよって食糧を確保して急場をしのぎ、後日、呉に危機の生ずる日のくることを待ち、その時こそ呉を助けることなく、呉を亡ぼそうというわけである。一方、越から食糧輸出の要請を受けた呉王夫差は、伍子胥の猛反対があったにもかかわらず、越に食べ物を送った。そのことがあって三年もたたないうちに、今度は呉が飢饉にみまわれた。そこで当然のこととして、先に助けた越に、糴米の輸出を依頼した。ところが、越はそれをことわっただけでなく、飢饉で弱っている呉に攻め入り、呉王夫差をとりこにしてしまった。

越の飢饉を救うことをせず、攻め入って亡ぼすべきであるという伍子胥のことばを、仁に反するとして退け、みずからの信ずる道義にのっとって越王句踐を助けたのが、呉王夫差であった。ところがここにのべたように、忘恩の挙に出た越王句踐が、勝利者として国勢をのばした功績をたたえられる幸福ものとなり、高い道徳の実践者としての呉王夫差が、亡国の捕虜としての辱しめに泣く不幸ものになってしまったのである。これが、越王句踐と呉王夫差との〝遇〟の結果にほかならない。このように、〝遇〟ということにからませてその当事者たちの幸不幸を見たとき、それは、その人々の日ごろの生き方とはなんらかかわりはない。正直者がなんら報われることがなく、それどころか負の評価をになうものとして、現実にはあらわれることすら多い。その逆もまた多く、そのような例として、『呂氏春秋』のこの部分では、越王句踐と同じく、情理に反する生き方をしながら、いわゆる功績のあるものとして、後世において称讃の対象となった楚の文王と趙の襄子とのことを書き伝えている。[14]

これまで見てきたところによって、〝遇〟のもたらす結果については、日ごろの当事者たちの生き方ともかかわりなく、人為をはるかに越えたものの大きな力が、そこに働いているかのごとくである。このようなところから〝遇〟を見たとき、そもそも、その〝遇〟をもたらしたものが何であり、何の力が〝遇〟をめぐって作用していると当時の人々は考えていたのであろうか。このことについて答えを与えてくれるのは、この章の冒頭に引いた文章の、「桀紂は不肖なりと雖も、その亡びしは湯武に遇へばなり。湯武に遇ひしは天なり。……湯武は賢なりと雖も、その王たりしは桀紂に遇へばなり。桀紂に遇ひしは天なり」（『呂氏春秋』巻第十四　孝行覧第二　長攻）という部分である。ここに明らかにされているように、〝遇〟をもたらすのは、天であるという。〝遇〟というのは二者の出会いであり、その二者の時間の共有である。天が、時間の流れのなかで二者を出会わせるのである。したがって、当然のこととして、〝遇〟の結果としての一身の幸不幸、一国の興亡のことなどにも、その天の意志が働いているのであって、人間の小さな思惑を超えているところがそこにはある場合も生じるのである。

四、時

ある人物の栄枯盛衰、あるいはまた国家の興亡に関連して、〃時〃ということがよくいわれる。以下に例を引いて示してみよう。

○聖人の事に於ける、緩に似て急、遲に似て速、以て時を待つ。王季歴くるしんで死す。文王これを苦しむ。羑里の醜を忘れざることあり。時いまだ可ならざればなり。武王これにつかへ、夙夜おこたらず、また玉門の辱を忘れず。立ちて十二年にして、甲子の事を成せり。時はつねに得やすからず。太公望は東夷の士なり。一世を定めんと欲して、その主なし。文王の賢を聞き、故に渭に釣して以てこれを觀たり。（聖人之於事、似緩而急、似遲而速、以待時、王季歴困而死、文王苦之、有不忘羑里之醜、時未可也、武王事之、夙夜不懈、亦不忘玉門之辱、立十二年、而成甲子之事、時固不易得、太公望、東夷之士也、欲定一世而無其主、聞文王賢、故釣於渭以觀之＝『呂氏春秋』巻第十四　孝行覧第二　首時）

ここでもまた、殷周の交代の際のことを説いているが、ここでは、〃時〃ということを問題にする。はじめ、周は殷に仕えていたが、その間の周の苦労はなみ大ていのものではなかった。そのため、文王の父、王季歴は疲労困憊して世を去った。文王はそうした父の死をあわれみながらも、殷の紂王の強大な権力のもとでは、それに反抗することもできなかった。しかも、紂王はそれに追いうちをかけるかのごとく、文王をとらえて、羑里に幽閉した。文王の子の武王は、父祖の辱しめを忘れないために、そのいましめとして父の築いた玉門と雲台をながめつづけた。周が殷に対して立ち上るには、まだ〃時〃が熟していなかったからである。武王は即位十二年にして、兵をおこし、紂王を伐つことができた。そうして、父祖以来三代の屈辱と恥をそそぎ、新らしく周王朝を興したのである。興国の〃時〃を得るということは、このように難しいことであるのである。しかも、周がこのようにして、三代の苦節を積んで〃時〃を得たことについては、ここに述べるように、太公望呂尚の力も、大きくあずかっているのである。〃時〃を得ることは、このようにむつかしい。右に引いた文のなかで、「時は固（つね）に得やすからず」というのも、当然のことであろう。

ここにのべたように、得ることの困難な〃時〃であるが、それを得るにはどのようにすればよいのであろうか。

○伍子胥、呉王に見えんと欲して得ず。客のこれを王子光に言ふものあり。……王子許せり。……伍子胥これに説く、……王子光大いに説（よろこ）ぶ。伍子胥おもへらく、呉國を有するものは必ず王子光ならん、と。退きて野に耕せり。七年にして、王子光は、呉王僚に代りて王となり、子胥に任じたり。子胥乃ち法制を修め、賢良に下り、練士を選び、戰鬪を習はしめたり。六年にして、然して後に大いに楚に柏舉に勝てり。九たび戰ひて九たび勝ち、北（に）ぐるを追ふこと千里、昭王は隨に出奔し、遂に郢を有し、親ら王宮を射、荆平の墳を鞭つこと三百。さきの耕せるは、その父の讎を忘れしにあらず、時を待てるなり。（伍子胥欲見呉王而不得、客有言之於王子光者、……王子許、

……伍子胥説之、……王子光大説、……伍子胥以爲有呉國者、必王子光也、退而耕于野、七年、王子光代呉王僚爲王、任子胥、子胥乃修法制、下賢良、選練士習戰鬬、六年、然後大勝楚于柏舉、九戰九勝、追北千里、昭王出奔隨、遂有郢、親射王宮、鞭荆平之墳三百、鄉之耕非忘其父之讎也、待時也＝『呂氏春秋』巻十四　孝行覽第二　首時）

ここでは、呉と楚の興亡のことを述べるのであるが、それを背景として、伍子胥が、父兄の讎である楚王に報いるための〝時〟を、いかにして得たかということを説いている。彼は仇うちの志しを達するために、楚の宿敵、呉王に接近しようとする。しかし果たせず、さらに苦労して、将来の呉王たる王子光に知られることに成功する。そうして、農耕に従事しながら、王子光が王位に即くのを待つ。七年にして王子光が王位についた。呉王に召された伍子胥は、六年間というもの、呉のために国力をたくわえ、戦力を練った。そのうえで楚に戦いをいどみ、九戦九勝し、亡父のために楚の王宮を射、平王の墓をあばいて鞭うつこと三百。伍子胥はみごとに父兄の讎に報いたのである。このように、父兄の讎をうつことを志しながら、その過程において伍子胥は一歩退いて、農耕に従事したりした。それはしかし、〝時〟を待つためであったのであると、ここにはいう。〝時〟はそのように何時でも有るものではない。だから、種々の工夫と努力を、その〝時〟を得るために払う必要のあることはいうまでもないが、待つということも、欠くことのできないことであるのである。

〝時〟とは、では、何であるのか。『呂氏春秋』の述べるところを、さらに見てみよう。

○聖人の時を見る、歩の影と離るべからざるが苦し。故に有道の士の、未だ時に遇はずんば、隱匿分竄、勤めて以て時を待つ。時至れば、布衣よりして天子と爲るものあり。千乘よりして天下を得るものあり。卑賤よりして三王を佐くるものあり。匹夫よりして萬乘に報ゆるものあり。故に聖人の貴ぶところは、ただ時なり。水凍りて方に固くば、后稷種せず。后稷の種は、必ず春を待つ。故に人、智なりと雖も、而も時に遇はずば功なし。（聖人之見時、若歩之與影不可離、故有道之士、未遇時、隱匿分竄、勤以待時、時至有從布衣而爲天子者、有從千乘而得天下者、有從卑賤而佐三王者、有從匹夫而報萬乘者、故聖人之所貴、唯時也、水凍方固、后稷不種、后稷之種、必待春、故人雖智而不遇時無功＝『呂氏春秋』巻第十四　孝行覽第二　首時）

〝時〟は、ここにいうように、人に功績を保証するものである。一たび〝時〟を得た人は、まるで日中に歩く人に、影がつきしたがって離れないように、〝時〟がその人に密着し、大いなる功績をなしとげさせる。したがって、〝時〟は、人を変化させるものということもできよう。そして、そのことが、ある場合には、国家の興亡を来たすのである。例えば、以下のごとくである。「匹夫」でありながら、万乘の君を讎として討とうとした、豫讓のような人物がいる。[15] また、卑賤の身から出て、ついに王者の輔佐となった、太公望・伊尹・傅説らのような人々がいる。[16] さらに、諸侯より身をおこして、天子の位にのぼったものに、殷の湯王・周の武王がいる。[17] さいごに、布衣、つまり庶民から出て天子となったものに舜がいる。[18] このように、〝時〟を得た人物の、いわば変身のさまはいろいろであるが、ここ

で特に注目したいのは、そのことが国家を興すことになった、舜と湯王と武王の場合である。これらの場合からして、〝時〟は、このように庶民や諸侯を天子に変化させる作用を持つものであるということもできよう。では、〝時〟がそのような大きな力を持つものだとすれば、その力は何に由来するものであるのだろうか。このことを、さらに考えてみたい。

○飢馬廏に盈つ。嘆然として未だ芻を見ざるなり。飢狗窖に盈つ。嘆然として未だ骨を見ざるなり。骨と芻とを見れば、動（あらそ）ひて禁ずべからず。亂世の民は、嘆然として未だ賢者を見ざるなり。賢人を見れば、則ち往きて止むべからず。往くものは、その形にあらず、心を謂ふか。齋は東帝を以て天下に困（くるし）み、而して魯、徐州を取り、邯鄲は壽陵を以て萬民に困み、而して衛は繭氏を取れり。魯衛の細を以てして、みな志を大國に得しは、その時に遇へるなり。故に賢主秀士の黔首を憂へんと欲するものは、亂世これに當れり。天は再び與へず。時は久しく留まらず。能く兩工ならず。事はこれに當るに在り。（飢馬盈廏、嘆然未見芻也、飢狗盈窖、嘆然未見骨也、見骨與芻、動不可禁、亂世之民、嘆然未見賢者也、見賢人則往不可止、往者非其形、心之謂乎、齋以東帝困於天下、而魯取徐州、邯鄲以壽陵困於萬民、而衛取繭氏、以魯衛之細、而皆得志大國、遇其時也、故賢主秀士之欲憂黔首者、亂世當之矣、天不再與、時不久留、能不兩工、事在當之＝『呂氏春秋』巻第十四　孝行覽第二　首時）

これまで見てきたところから考えてみると、〝時〟は多く乱世に出現していたことがわかるであろう。ここに引いた文章でそのことを明言し、「賢主秀士の、黔首を憂へんと欲する者は、乱世これにあたれり」と表現している。このように、乱世において苦しむのは、一般に庶民であろう。このとき、庶民の幸福を真に願う、〝賢主秀士〟が現れたならば、庶民の心は、一斉にそちらに向くであろう。そうして、それをとどめることはできないであろう。そこには、それを阻止することのできない、大きな力が生じるからである。それは、あたかも飢馬飢狗に、草と骨を示すようなものだからである。小国の魯や衛が、大国の斉や趙から、徐州と繭氏を取ったのも、そうした力に依拠したからである。ここに、「事はこれにあたるにあり」というように、何事かを成すには、あるいは何事かが成るには、ここに述べるような力に乗り、それを利用しなければならない。この力の貴重なことは、何物にも代えられない。では、このような力に乗ずべき機会は、誰が与え、なおかつそれは何時でもあるものなのだろうか。それについて、ここに引いた文章では、「天は再び与えず。時は久しく留まらず」という。これによって、結局、〝時〟は天が与えるものであると考えられていたということが、明らかとなるであろう。そしてそれは、「久しく留まらない」ものであるとも、考えられていたのである。

これまでに明らかになったように、〝時〟はある場合には、布衣、つまり庶民を天子にまで作りかえるほどの、大きな作用をなすのである。これはとりもなおさず、国家を興すことでもある。そのような大きな力は、天に由来するのであるが、それが存在するのは、「久しく留まらず」といわれるように、限られている。その場面は、乱

世に苦しむ庶民と、賢主秀士が出会って、一丸となって、新王朝建設にむかうというような、時と場所とに代表されるようなものである。このような場面は、そう多くあるわけではなく、『呂氏春秋』では、それを天が与えたのであるといっているのである。

五、天道と国家の消長

これまでの各章において、〃始〃・〃因〃・〃遇〃・〃時〃などという用語について見てきた。これらは、『呂氏春秋』において、国家の興亡にかかわることを述べるときに使用されたことばであり、しかも、なんらかのかたちで、時間に関係を持っているかのごとくであった。そこで、ここでは、『呂氏春秋』における時間についての見方の、基本的性格について考えてみたい。まず、つぎの文章をみてみよう。

○日夜一周するは圜[19]（えん）道なり。月二十八宿に躔（やど）り、軫と角と屬するは、圜道なり。精四時に行はれ、一上一下、おのおの與に遇ふは圜道なり。物動けば則ち萌し、萌して生じ、生じて長じ、長じて大に、大にして成る。成れば乃ち衰ふ。衰ふれば乃ち殺し、殺すれば乃ち藏するは、圜道なり。（日夜一周、圜道也、月躔二十八宿、軫與角屬圜道也、精行四時、一上一下、各與遇、圜道也、物動則萌、萌而生、生而長、長而大、大而成、成乃衰、衰乃殺、殺乃藏、圜道也＝『呂氏春秋』巻第三　季春紀第三　圜道）

ここでは、まず、日（＝太陽）と月とが、円軌道をえがくかたちで運動しているということから説きおこしている。天体のこの止むことなき円運動こそが、実は、万物の、あるいはまた物一般の運動のかたちであるというのである。そうして、物一般の生成消滅について、ここではつぎのようにいう。物が生ずるには、まず、〃気〃が動くのである。その動き方は、地の〃気〃は上り、天の〃気〃は下り、それらが前述の円軌道をえがきながら、上り下りをくりかえす。その際、同一の円軌道上を動くので、二つの〃気〃は、〃遇〃（あ）うことがあるのである。こうして〃気〃が動きはじめたときが、物の生ずる萌（きざ）し、つまり、〃始〃である。そこから、その物の、もと、つまり〃因〃が生じ、それが勢いを得て、〃時〃が熟すると、その物が完成する。一たび完成したもの、つまり極点にまで達したものは、消滅の道をたどり、やがてまた生成の道をたどることになる。物一般の、この動きも、先の天体の動きと同じく、円運動であると、ここではいう。こうして、『呂氏春秋』では、万物は円運動をし、その過程において生成消滅をくりかえすのだという。では、ここにいう、万物のとる円運動とは、結局、何であるのであろうか。

○天道は圜に、地道は方なり。聖王これに法り、上下を立つるゆえんなり。何を以て天道の圜（まる）きを説く。精氣は一上一下、圜周復雑、稽留するところなければなり。故に曰く、天道は圜なりと。（天道圜、地道方、聖王法之、所以立上下、何以説天道圜也、精氣一上一下、圜周復雑、無所稽留、故曰天道圜＝『呂氏春秋』巻第三　季春紀第三　圜道）

前にも述べたように、この世を構成している〃気〃が、ぐるぐると止まることのない円運動をくりかえしている。このような〃気〃の円運動が、万物の生成消滅の過程の基本をなしているのである。

そうして、その円運動が、ここにいうところによれば、天の道であるという。つまり、天の定めた掟であるという。だからこそ、聖王は、それに則って秩序を定め、国を営むのだという。いずれにしても、万物の生成消滅のとる円運動は、これは、天の道そのものだという。このことばには、注目しなければならない。

ところで、万物の生成消滅の過程は、前にものべたように、始めがあり、終りがあり、それらが円運動をなして、くりかえしているというのが、『呂氏春秋』の述べるところであった。始めがあって終りがあるということは、時間の流れが円運動をなしているという、時間の基本的な性格がのべられていることになるのである。時間についての、同様な見解を、別のところでは、またつぎのようにいう。

○太一は両儀を出し、両儀は陰陽を出す。陰陽の變化は、一上一下、合して章を成す。渾渾沌沌として、離るれば則ちまた合ひ、合へば則ちまた離る。これを天常と謂ふ。天地は車輪のごとく、終れば則ちまた始まり、極まれば則ちまた反り、みな當（あ）はざる莫し。（太一出兩儀、兩儀出陰陽、陰陽變化、一上一下、合而成章、渾渾沌沌、離則復合、合則復離、是謂天常、天地車輪、終則復始、極則復反、莫不咸當＝『呂氏春秋』巻第五　仲夏紀第五　大樂）

このように、陰陽の気の運動に由来する天地の間の万物の生成消滅の動きは、車輪の回転にたとえられるのである。こうして、天地の間にある万物が、天の道であるところの円運動をしているものであるとすれば、国家といえども、その例から免かれることはできないであろう。その運営も、運命、つまり消長も、やはり天の道である円運動にしたがっているのである。以下に説くごとくである。

○天道は圜に、地道は方なり。聖王はこれに法り、上下を立つるゆえんなり。……萬物は類を殊にし、形を殊にし、みな分職ありて相爲す能はず。故に曰く、地道は方なりと。主は圜を執り、臣は方に處り、方圜かはらざれば、その國乃ち昌（さか）ゆ。（天道圜、地道方、聖王法之、所以立上下、……萬物殊類殊形、皆有分職、不能相爲、故曰地道方、主執圜、臣處方、方圜不易、其國乃昌＝『呂氏春秋』巻第三　季春紀第三　圜道）

主、つまり国君が、天道であるところの圜道に則って改治をとるかぎりにおいて、その国は昌（さか）えるのである。しかし、その国といえども、例えば、国君が怠ったりすることが原因となり、いつかは亡びるであろう。万物は消長するのが、天の道であるからであり、何よりも歴史をふりかえってみれば、亡びなかった王朝は、ひとつも無いことによっても、そのことはわかるであろう。

『呂氏春秋』においては、国家をこのように、消長の相において見るのである。このことはまた、時間的変化のなかで、国家を見るということでもあるのである。

おわりに

「精四時に行はれ、一上一下、おのおの與に遇ふは圜道なり。物動けば則ち萌し、萌して生じ、生じて長じ、長じて大に、大にして成る。成れば乃ち衰ふ。衰ふれば乃ち殺し、殺すれば乃ち藏するは、

圜道なり」（『呂氏春秋』巻第三　季春紀第三　圜道）。これはすでに第五章で見てきたように、万物の生成消滅を論じ、それが天の定めた道である円運動をとって行われていることを述べた文章である。そうして、第一章から第四章までに考察を加えてきた、〝始〟・〝因〟・〝遇〟・〝時〟は、すべてこの円運動、あるいは循環運動の一過程であるということも、すでに第五章で確認したところである。このことは、何を意味するであろうか。それはいうまでもなく、〝始〟・〝因〟・〝遇〟・〝時〟などという過程を持って消長する国家こそは、天道にしたがった、いわば正統な国家であるということである。

万物の生成消滅を天道の一環として位置づけ、それを円運動の相でとらえる考え方があり、戦国時代の陰陽家[20]の人々は、それを強く主張した。彼らはこの立場から夏・殷・周三代の興亡を分析し、そこに天に由来し、かつ天道、つまり円運動の一過程である、〝始〟・〝因〟・〝遇〟・〝時〟を見出した。すなわち、三代は、それぞれ天道にかなう正統な王朝であるとしたのである。では、戦国の混沌の中で、その三代を継ぐ正統はどこであるのか。この問いに答えるべく、当時の陰陽家たちは三代のことを分析し、その視点を前述のところに得たのであった。そうして、その結論は、以下のごとくであったのである。

○呉起、西河の外を治む。王錯これを魏の武侯に譖る。武侯、人をしてこれを召さしむ。呉起、岸門に至り、車を止めて休み、西河を望みて、泣（なみだ）數行にして下る。……呉起、泣を雪（ぬぐ）ひて……曰く、君まことにわれを知りて、われをして能を畢（つく）さしめば、秦は必らず亡ぶべくして、西河は以て、王たるべし。今、君、譖人の議を聽きて、われを知らず。西河の秦となるや久しからざらん。魏國これより削られん、と。呉起つひに魏を去りて荆に入る。而して西河は畢く秦に入り、魏は日を以て削られ、秦は日に益々大なり。これ呉起の先見して泣きし所以なり。……人もまた徵あり。事と國もまた徵あり。聖人は、上は千歳を知り、下は千歳を知る。（呉起治西河之外、王錯譖之於魏武侯、武侯使人召之、呉起至於岸門、止車而休、望西河泣數行而下、……呉起雪泣而……曰、君誠知我而使我畢能、秦必可亡、而西河可以王、今君聽譖人之議、而不知我、西河之爲秦也不久矣、魏國從此削矣、呉起果去魏入荆、而西河畢入秦、魏日以削、秦日益大、此呉起之所以先見而泣也……人亦有徵、事與國皆有徵、聖人上知千歳、下知千歳＝『呂氏春秋』巻二十　恃君覧第八　觀表）[21]

ここに、「秦は日にますます大なり」という。それは、呉起が先見したように、秦にはその〝徵〟があったからである。この〝徵〟は、すでに第一章でのべたように、〝始〟に関連したことばである。ほとんど、〝始〟といいかえてもよいであろう。秦には、本質的に大国となる要素が外在しており、大国としての道をすすみ始めていたのである。このことが、呉起には先見できたのであろう。秦こそは、したがって、天道に則って日々大となる必然性があり、同時に、戦国の乱世からぬけ出て、帝国を築くべき正統性があるというのが、当時の陰陽家たちの見るところであったのである。

注

①物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣＝『大學』經一章。
②明足以察秋毫之末＝『孟子』梁惠王（上）。獸の毛は秋にぬけかわるが、そのときの毛は非常に細い。その毛を秋毫という。
③高（誘）注：見其始、知其終、故曰觀化遠也。……譚戒甫曰、高讀不誤……奇猷案：譚説是。化即知接『告之以遠化』之化、謂日後必至之勢。『孔子見之以細、觀化遠也』、猶言孔子察事於細微、而推知日後必至之勢也＝『呂氏春秋校釋』巻十六　察微。
④前掲注③参照。
⑤隆當作格、格鬪也＝高誘。
⑥七月二十九日、違兵忌晦戰、擊楚所不意＝杜預『春秋經傳集解』。
⑦州來については、『春秋大事表』一に、『歴代紀事年表』を引いて、姬姓の国という。その存滅については、詳しくは、『春秋大事表列國爵姓及存滅表譔異』（陳槃）㈤参照。
⑧此承上句「先知必審徵表」、此亦當作「無審徵表而欲児知」、今脱「審」字。（陳奇猷『呂氏春秋校釋』巻二十　一四一六頁注（九）参照。
⑨高注：徵、應。表、異。一曰奇表。范耕研曰、高注非是。……此所謂「審徵表」者、一則由微而知者、一則由外而察内……奇猷案……范説近之而未盡也＝『呂氏春秋校釋』一四一五頁～一四一六頁　注（八）。
⑩『呂氏春秋校釋』巻二十　一四一五頁～一四一六頁　注（八）における陳奇猷の説による。その要点は以下のごとくである。所謂徵者謂物體特異之處、即今所謂「特徵」。……所謂表者、謂意向之表現。
⑪本文には「孔子道彌子瑕、見釐夫人、因也」という。しかし、ここは以下の説に従う。畢沅曰、梁仲子云、「淮南泰族訓云『孔子欲行王道、東西南北七十説而無所偶、故因衞夫人、彌子瑕而欲通其道』、語義政合、此似有脱誤。然此皆戰國時人所爲也」。……今依左傳改正＝許維遹『呂氏春秋集釋』巻十五　貴因。
⑫高注：民雖衆多、不能使之不亡、故曰何益、桀紂是也＝陳奇猷『呂氏春秋校釋』九三四頁　注（三六）。
⑬奇猷案、兪（樾）謂「設、合也」是也。國語魯語韋昭注、「合、成也」。「各一」謂不相遇。「各一則不設」猶言不相遇則不成也。……數「遇」字皆遭遇之意、明此「遇」字不得讀爲偶也＝陳奇猷『呂氏春秋校釋』七九三頁　注（二）。
⑭楚の文王は、息国と蔡国とを亡ぼして奪った。このことは、『春秋左氏傳』荘公十年および十四年を参照。また趙の襄子は、代国を奪った。このことについては、『史記』趙世家などを参照。
⑮豫讓是也、趙襄子兼土拓境、有兵車萬乘、豫讓爲智伯報之、襄子高其義而不殺、豫讓卒不止、終得斬襄子襯身之衣、然後就死也＝高誘注。詳しくは『史記』巻八六。
⑯太公望、伊尹、傅説、是也＝高誘注。なお、太公望は周の文王を、伊尹は殷の湯王を、傅説は殷の中興の祖、武丁、つまり高宗を輔佐した。
⑰湯武是也＝高誘注。
⑱舜是也＝高誘注。
⑲圜は環または円。
⑳『呂氏春秋』編纂の当時、陰陽家の活躍は目ざましいものがあったようである。『呂氏春秋』でも、陰陽家の主張が中心になっている章が多い。例えば、陳奇猷『呂氏春秋校釋』では、以下の章を、陰陽家の言をのべた章とする。
巻一＝「本生」「重己」
巻三＝「圜道」
巻十一＝「至忠」
巻十三＝「有始」「應同」
巻十四＝「首時」「義賞」「長攻」「愼人」「遇合」「必己」
巻十五＝「不廣」「貴因」
巻十六＝「先識」「觀世」「知接」「悔過」「察微」
巻二十＝「行論」「驕恣」
巻二十一＝「開春」「察賢」「期賢」
巻二十二＝「求人」「察傳」
巻二十三＝「知化」「壅塞」「原亂」

巻二十四＝「自知」「當賞」「博志」「貴當」
巻二十五＝「似順」
ほかに陰陽家の説が多く雑っている章として、
巻五＝「大樂」
また、陰陽家が法家の説を採ったものとして、
巻十六＝「樂成」
さらに、兵家と陰陽家の説のまじったものとして、
巻十八＝「精諭」
巻二十＝「召類」。
これは、『呂氏春秋』全百五十九章のうちの三十八章、実に、約二十四パーセントにあたる。

㉑陳奇猷は、『漢書藝文志』の「形法者、形人及六畜骨法之度數……」と、この章の末尾に、馬の徴を見るところがあるのを結びつけ、この章を形法家の言と見なしている。しかし、陳奇猷は、「本篇所擧郈成子與吳起事、正是從事物徴表以求其吉凶」ともいっている。したがって、吉凶の占いのこともよくした陰陽家の言として、この章をあてても、大過はないと思われる。